白梅学園短期大学　教育・福祉研究センター研究年報　No.12　24～40（2007）

「子ども家庭支援センターにおける広場の機能と広場利用の効果」

塚崎 京子・山形 明子・無藤　隆

目的と仮説

地域における子育て支援が推進されているが，その実態や有用性についての心理学的視点からの研究は少ない。とくに近年増加している「子育ての広場」については親子の育ちを支える場として機能しうる可能性を秘めており，より効果的な活動のために研究が求められる。そこで，今回は東京都の子ども家庭支援センターを対象として広場の機能や広場利用の効果を実証的に検証し，子育て支援に果たす役割や意義を提唱したい。子ども家庭支援センターを対象とした理由は，①設立の目的や場の特質が共通しており都内の現況をひろく調査することができること，②誰でも自由に使えるという地域子育て支援の鍵となる特性をもつ公的機関であること，③スタッフが常駐する施設でありその役割についての検討が可能であること，④個々の活動内容や状況の比較を通じて地域に根ざした支援のあり方のモデルを提唱できること，である。

本研究では，子ども家庭支援センターにおける広場の機能と広場利用の効果を，①全体的傾向，②広場の特性による比較，③利用者の特性による比較，という観点から検討することを目的とする。また，広場の機能については，以下の6つの仮説をたて，これらにそって考察を行う。

1．広場は「子どもの遊び場所」「息抜きやリフレッシュの場」「他の母親との交流の場」「情報や知識を得る場」「親子関係を見直す場」「自分の力を発揮する場」「相談する場」という7つの機能を果たしているだろう。
2．広場にスタッフが参加しているほうが情報の収集や親子関係の見直し，相談などの点で広場が機能するだろう。
3．プログラムが日常的に実施されていると子どもの遊び場としての機能が高いだろう。
4．利用頻度や利用形態が多いほど広場を活用し，機能の評定も高いだろう。
5．子どもの年齢により機能は異なり，子どもの年齢が高いほど自分の力を発揮する場となりやすいだろう。
6．きょうだい数が少ない群では情報を得る場として機能しているだろう。

方法

調査方法と手続き

質問紙法により実施した。手続きは以下のとおりである。

配布方法：1．調査者が広場で説明・配布
2．センターのスタッフが説明・配布
3．広場に設置し貼り紙で呼びかけ，の3つの形態のうちから各センターの状況に応じて選択
回収方法：その場で調査者が回収，あるいは後日個別に郵送

対象

2003年4月時点で東京都内に設置されていた43ヶ所の子ども家庭支援センターを対象に事業の実態についてのアンケート調査を行い，その結果広場を実施していると回答のあった18区市町20ヶ所（うち2つの区市は2ヶ所設置）の子ども家庭支援センターの広場利用者512名。うち，分析に必要なフェイスシート項目に記入漏れのない503名を分析の対象とした。

実施時期

2003年10月末から11月に配布し回収時期はそれに対応して2003年10月から12月

質問紙の構成

（1）広場利用の頻度（2）利用形態（3）広場利用の満足度（4）広場の機能(仮説1で想定した7つの機能について各2～3項目ずつからなる尺度を作成)（5）スタッフの役割（スタッフの役割として，「遊び提供」「相談者」「育児知識提供」「雰囲気づくり」「つなぎ役」の5つを設定）（6）広場利用の効果（神田・山本（2001）の子育て支援センター参加者の満足度6項目に，独自に7項目を追加し，広場の利用による変化として肯定的な項目9つと否定的な項目4つからなる尺度を作成）（7）広場に対する今後の希望（今後の希望として考えられるものを9項目想定）（8）子育ての全般的なニーズ（神田・山本（2001）の子育て支援要求項目や厚生労働省（2003）の保育サービス以外のサービスへの期待項目を参考に，ひろく必要とされる一般的なニーズを8つ設定）（9）フェイスシート（子どもの性別，年齢，出生順位，センターまでの交通手段と所要時間）

結　果

① 全体的傾向

1．広場の機能

「広場はあなたにとってどんな場所ですか？」と広場の機能についての15項目に「1．とてもあてはまる」から「5．ぜんぜんあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。「1．とてもあてはまる」を5点，「2．少しあてはまる」を4点，「3．どちらともいえない」を3点，「4．あまりあてはまらない」を2点，「5．ぜんぜんあてはまらない」を1点として得点化した。各項目の平均値と標準偏差を表1に示す。次に，仮説1を検証するため，想定した7つの機能について機能得点を算出した。その結果，想定した7つの機能について〔自分の力を発揮する場〕以外は平均値が評定の中間点を超えたため（図1），〔子どもの遊び場所〕〔息抜きやリフレッシュの場〕〔他の母親との交流の場〕〔情報や知識を得る場〕〔親子関係を見直す場〕〔相談する場〕の6つについては機能を果たしていることが確認され，仮説1はほぼ支持された。

2．広場利用の効果

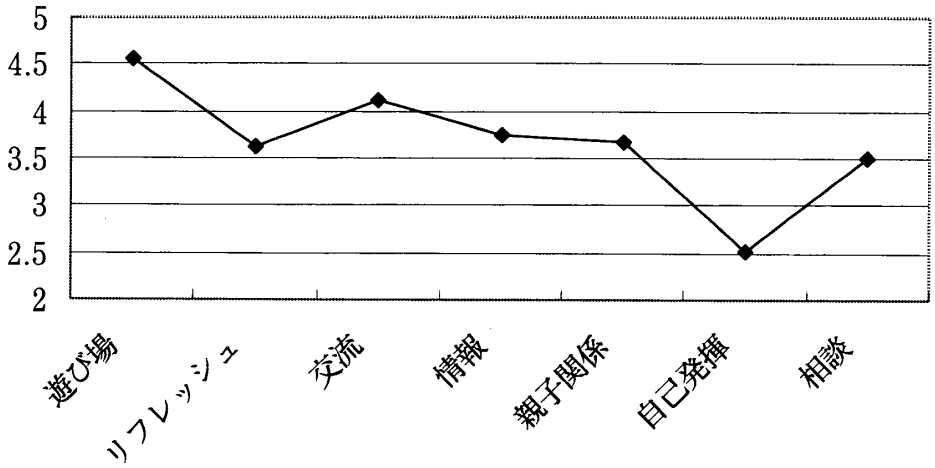
広場を利用することによる主観的な効果について，13項目に「1．とてもあてはまる」から「5．ぜんぜんあてはまらない」までの5件法で回答を求めた。「1．とてもあてはまる」を5点，

表－1　広場機能各項目の平均値と標準偏差

項　　目	平均値	標準偏差
1．家ではできない遊びや活動をするところ	4.61	.59
2．ホッと一息つくところ	3.78	1.00
3．他のお母さんたちと交流するところ	4.23	.87
4．子育てについての情報を得るところ	4.03	.90
5．自分の子育てについて振り返るところ	3.51	1.00
6．自分で積極的に何かに取り組むところ	2.83	1.00
7．日頃のストレスや不安を解消するところ	3.47	1.11
8．友達を作ったり会ったりするところ	3.97	.99
9．悩みや心配ごとを聞いてもらえるところ	3.56	1.12
10．子育てや子どもの発達について知るところ	3.82	1.00
11．子どもとのつき合いかたを見直したり学ぶところ	3.83	.98
12．サークル活動などで自分の力を発揮するところ	2.21	1.09
13．子どもが他の子どもたちと遊ぶところ	4.50	.76
14．地域の生活情報を得るところ	3.41	1.12
15．心配ごとを気軽に相談するところ	3.44	1.14

「2．少しあてはまる」を4点，「3．どちらともいえない」を3点，「4．あまりあてはまらない」を2点，「5．ぜんぜんあてはまらない」を1点として得点化した。各項目の平均値と標準偏差を表2に示す。

図－1　広場の機能



表－2　広場利用による効果項目の平均値と標準偏差

項　　目	平均値	標準偏差
1．子育ての知識などを学べる	3.77	.92
2．今までの不安が減った	3.59	1.01
3．子どもが他の子どもと遊べる	4.47	.76
4．気軽に行ける居場所ができた	4.55	.69
5．リフレッシュができる	4.02	.94
6．自分の友達ができた	3.81	1.14
7．子育てが楽しくなった	3.70	.92
8．子どもとのつき合いかたを見直せる	3.77	.90
9．地域でのつき合いが広がった	3.39	1.13
10．他のお母さんたちとのつき合いが面倒だ	2.29	.98
11．いろいろな情報や話に左右されてしまう	2.16	.98
12．自分の育児に自信がなくなることがある	2.13	1.06
13．他の子どもと自分の子を比べてしまう	2.69	1.17

② 広場の特性による比較

広場の特性により各得点について一元配置の分散分析を行ない，仮説2と仮説3を検証した。分析はすべて SPSS 11.5 J for Windows を用い多重比較は等分散性が仮定されたものについては Tukey 法，仮定されないものについては Dunnett の T3法を用いた。

（1）スタッフの参加形態による各得点の比較

広場へのスタッフの参加形態を「担当者が常に参加」「適宜誰かが参加」「担当者がときどき参加」「スタッフは参加しない」の4群に分け，一元配置の分散分析を行なった。各群の人数は以下のとおりである。

表－3　スタッフの参加形態別人数

参加形態	人数（%）	
1　担当者常に参加	321	(63.8)
2　適宜誰か参加	50	(9.9)
3　担当者時々参加	94	(18.7)
4　スタッフ参加せず	38	(7.6)

1．広場の機能

表－4　スタッフの参加形態による機能得点の比較

	担当常時	適宜誰か	担当時々	スタッフなし	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.57 (.52)	4.50 (.61)	4.56 (.50)	4.53 (.48)	.28 n.s	
リフレッシュ	3.61 (.99)	3.71 (.83)	3.73 (.82)	3.33 (.86)	1.81 n.s	
交流	4.06 (.89)	4.22 (.78)	4.30 (.73)	3.83 (.84)	3.58 *	4<3
情報	3.77 (.83)	3.75 (.85)	3.73 (.79)	3.63 (.79)	.35 n.s	
親子関係	3.71 (.87)	3.77 (.89)	3.56 (.90)	3.50 (.90)	1.38 n.s	
自己発揮	2.47 (.94)	2.59 (.92)	2.76 (.89)	2.32 (.85)	3.10 *	1<3
相談	3.53 (1.07)	3.56 (1.04)	3.42 (1.00)	3.33 (1.19)	.64 n.s	

（　）内は標準偏差　*：p<.05

「交流」と「自己発揮」で有意な差が見られた（F(3,497)=3.83,p<.05;F(3,497)=2.32,p<.05）。多重比較の結果，スタッフが参加しない群よりも担当者がときどき参加する群が「交流」の得点が有意に高く，「自己発揮」についても担当者がときどき参加する群が，担当者が常に参加する群よりも高得点であった。仮説2「広場にスタッフが参加しているほうが情報の収集や親子関係の見直し，相談などの点で広場が機能するだろう」は支持されなかった。

2．広場利用の効果

表－5　スタッフの参加形態による効果得点の比較

	担当常時	適宜誰か	担当時々	スタッフなし	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.78 (.96)	3.98 (.83)	3.67 (.89)	3.73 (.80)	1.26 n.s	
2．不安減少	3.61 (1.04)	3.72 (.90)	3.53 (.99)	3.34 (.99)	1.17 n.s	
3．子ども交流	4.46 (.77)	4.44 (.86)	4.54 (.70)	4.45 (.65)	.32 n.s	
4．居場所	4.55 (.70)	4.66 (.69)	4.52 (.69)	4.42 (.60)	.93 n.s	
5．リフレッシュ	4.00 (.98)	4.20 (.86)	4.10 (.77)	3.74 (1.03)	2.02 n.s	
6．母親友達	3.82 (1.15)	3.74 (1.12)	4.07 (1.01)	3.29 (1.25)	4.30 **	4<3
7．子育て楽しさ	3.71 (.94)	3.66 (.82)	3.80 (89)	3.42 (.86)	1.57 n.s	
8．親子関わり見直し	3.79 (.90)	3.86 (.76)	3.63 (.88)	3.79 (1.12)	.92 n.s	
9．地域のつきあい	3.40 (1.15)	3.50 (.99)	3.49 (1.08)	2.89 (1.13)	2.92 *	4<3
10. つきあい面倒	2.34 (.99)	2.16 (.89)	2.20 (.98)	2.21 (1.04)	.93 n.s	
11. 情報左右	2.16 (.95)	2.06 (1.04)	2.32 (1.05)	2.00 (.96)	1.29 n.s	
12. 自信喪失	2.14 (1.07)	1.98 (.96)	2.25 (1.04)	1.95 (1.16)	1.10 n.s	
13. 子ども比較	2.69 (1.17)	2.38 (1.18)	2.92 (1.10)	2.53 (1.22)	2.69 *	2<3

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

「自分の友達ができた」（F(3,496)=4.30,p<.01），「地域でのつき合いが広がった」（F(3,496)=2.92,p<.05），「他の子と自分の子を比べてしまう」（F(3,496)=2.69,p<.05）で有意な差が見られた。多重比較の結果，「自分の友達ができた」と「地域でのつき合いが広がった」ではどちらも，スタッフが参加しない群よりも担当者がときどき参加する群のほうが得点が高かった。「他の子と自分の子を比べてしまう」では，適宜誰かが参加する群よりも担当者がときどき参加する群の方が高得点だった。

（2）プログラムの実施頻度による各得点の比較

各得点についてプログラムの実施頻度による一元配置分散分析を実施した。各センターが提供するプログラムについて，各センターで配布する予定表などのパンフレットとスタッフへの聞き取りをもとに実施頻度を5つのグループに分類した。それぞれの群の人数は以下のとおりである。

表－6　プログラムの実施頻度別人数

プログラム頻度	人数（%）	
1　なし	88	(17.5)
2　～月1回	82	(16.3)
3　月2回	99	(19.7)
4　週1～2回	106	(21.1)
5　週3回～毎日	128	(25.4)

1．広場の機能

表－7　プログラムの頻度による広場機能得点の比較

	なし	月1回	月2回	週1～2回	週3～毎日	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.49(.53)	4.48(.54)	4.49(.55)	4.68(.47)	4.59(.52)	2.82 *	n.s
リフレッシュ	3.59(.90)	3.75(.91)	3.39(.89)	3.70(1.02)	3.68(.93)	2.29 n.s	
交流	4.22(.81)	3.87(1.05)	3.94(.83)	4.12(.85)	4.28(.71)	4.23 **	2,3<5
情報	3.62(.85)	3.75(.85)	3.75(.81)	3.82(.84)	3.80(.76)	.85 n.s	
親子関係	3.44(.98)	3.76(.83)	3.58(.89)	3.78(.86)	3.76(.83)	2.74 *	n.s
自己発揮	2.49(.87)	2.57(.98)	2.50(.89)	2.61(1.01)	2.46(.91)	.47 n.s	
相談	3.22(1.05)	3.66(1.02)	3.38(1.11)	3.59(1.01)	3.60(1.07)	2.89 *	n.s

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

「遊び場」（F(4,496)=2.82,p<.05），「交流」（F(4,496)=4.23,p<.01），「親子関係」（F(4,496)=2.74, p<.05），「相談」（F(4,496)=2.89, p<.05）で有意な差が見られた。多重比較の結果，「遊び場」「親子関係」「相談」では5群に有意差は見られず，「交流」では月1回の群と月2回の群よりも毎日実施している群の方が得点が高かった。

よって，仮説3「プログラムが日常的に実施されていると子どもの遊び場としての機能が高いだろう」は支持された。

2．広場利用の効果

表－8　プログラムの頻度による効果得点の比較

	なし	月1回	月2回	週1～2回	週3～毎日	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.60(.92)	3.88(1.02)	3.78(.84)	3.71(1.02)	3.87(.82)	1.55 n.s	
2．不安減少	3.53(.91)	3.60(1.20)	3.44(.96)	3.61(1.08)	3.71(.93)	1.05 n.s	
3．子ども交流	4.46(.74)	4.28(.85)	4.44(.77)	4.52(.69)	4.57(.73)	2.03 n.s	
4．居場所	4.31(.80)	4.55(.59)	4.51(.64)	4.63(.64)	4.66(.71)	4.07 **	1<4,5
5．リフレッシュ	3.92(.93)	4.06(.96)	3.78(.99)	4.22(.84)	4.09(.93)	3.33 *	3<4
6．母親友達	3.88(1.03)	3.56(1.30)	3.60(1.21)	4.00(1.05)	3.95(1.09)	3.16 *	n.s
7．子育て楽しさ	3.68(.91)	3.62(1.00)	3.56(.85)	3.88(.90)	3.73(.91)	1.81 n.s	
8．親子関わり見直し	3.60(.95)	3.86(.92)	3.73(.98)	3.88(.91)	3.77(.79)	1.44 n.s	
9．地域のつきあい	3.34(1.10)	3.33(1.13)	3.12(1.10)	3.51(1.18)	3.55(1.09)	2.53 *	3<5
10. つきあい面倒	2.08(.99)	2.29(1.07)	2.39(1.00)	2.30(.97)	2.34(.91)	1.34 n.s	
11. 情報左右	2.25(1.06)	1.98(1.01)	2.22(.86)	2.12(1.02)	2.22(.95)	1.16 n.s	
12. 自信喪失	2.17(1.05)	2.10(1.05)	2.10(1.07)	2.15(1.12)	2.13(1.02)	.08 n.s	
13. 子ども比較	2.71(1.18)	2.54(1.23)	2.67(1.12)	2.75(1.12)	2.73(1.21)	.48 n.s	

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

「気軽に行ける居場所ができた」「リフレッシュができる」「自分の友達ができた」「地域でのつき合いが広がった」で有意な差が見られた（順に，F(4,497)=4.07,p<.01;F(4,497)=3.33,p<.05;F(4.497)=3.16,p<.05;F(4,497)=2.53,p<.05)。多重比較の結果，「気軽に行ける場所ができた」ではプログラムがない群に比べ週1～2回の群と毎日実施の群の得点が高かった。「リフレッシュができる」では，月2回の群に比べて週1～2回の群が高得点だった。「自分の友達ができた」は4群に有意差はみられなかった。「地域でのつき合いが広がった」では月2回の群よりも毎日の群の方が高得点だった。

③ 利用者の特性による各得点の比較

利用者の特性により各得点について一元配置の分散分析を行ない，仮説4から仮説6を検証した。分析はすべてSPSS 11.5 J for Windowsを用い，多重比較は等分散性が仮定されたものについてはTukey法，仮定されないものについてはDunnettのT3法を用いた。

（1）利用頻度による各得点の比較

利用頻度により各得点に差が見られるかを明らかにするため，利用頻度を「数ヶ月に1回」「月1回」「2週間に1回」を低群，「週1～2回」「週3～4回」「ほぼ毎日」を高群に分類し，2群による比較を行なった。各群の人数は以下のとおりである。

表－9　利用頻度別人数

頻　度	人数（%）	
低　群	202	(40.2)
高　群	301	(59.8)

1．広場の機能

表－10　利用頻度による広場機能得点の比較

	低群	高群	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.46 (.54)	4.62 (.51)	11.51 **	低<高
リフレッシュ	3.39 (.92)	3.78 (.92)	21.82 **	低<高
交流	3.88 (.91)	4.25 (.78)	24.33 **	低<高
情報	3.60 (.83)	3.85 (.80)	11.20 **	低<高
親子関係	3.53 (.91)	3.77 (.85)	8.64 **	低<高
自己発揮	2.50 (.95)	2.54 (.92)	.19 n.s	
相談	3.19 (1.07)	3.70 (1.01)	28.95 **	低<高

（　）内は標準偏差　**：p<.01

「自己発揮」以外のすべての項目で有意な差が見られた。結果は「遊び場」F(1,499)=11.51, p<.01,「リフレッシュ」F(1,499)=21.82,p<.01,「交流」F(1,499)=24.32,p<.01,「情報」F(1,499)=11.20,p<.01,「親子関係」F(1,499)=8.64,p<.01,「相談」F(1,499)=28.95,p<.01であった。多重比較を行なったところ，全ての項目で頻度高群のほうが得点が高かった。

2．広場利用の効果

ポジティブな効果を表す全項目で有意な差が見られた。順に「子育ての知識などを学べる」F(1,497)=18.77, p<.01,「今までの不安が減った」F(1,497)=38.44,p<.01,「子どもが他の子どもと遊べる」F(1,497)=10.19,p<.01,「気軽に行ける居場所ができた」F(1, 500)=68.14,p<.01,「リフレッシュができる」F(1,499)=25.80,p<.01,「自分の友達ができた」F(1,498)=65.07,p<.01,「子育てが楽しくなった」F(1,499)= 21.38,p<.01,「子どもとのつき合いかたを見直せる」F(1,499)=3.85,p<.05,「地域でのつき合いが広がった」F(1,499)=31.23,p<.01，である。多重比較の結果，いずれも頻度高群のほうが高得点であった。

表－11　利用頻度による効果得点の比較

	低群	高群	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.56 (.98)	3.92 (.86)	18.77 **	低＜高
2．不安減少	3.26 (1.03)	3.81 (.94)	38.44 **	低＜高
3．子ども交流	4.34 (.80)	4.56 (.72)	10.19 **	低＜高
4．居場所	4.25 (.79)	4.74 (.53)	68.14 **	低＜高
5．リフレッシュ	3.77 (.93)	4.19 (.91)	25.80 **	低＜高
6．母親友達	3.34 (1.19)	4.13 (.99)	65.07 **	低＜高
7．子育て楽しさ	3.47 (.90)	3.85 (.89)	21.38 **	低＜高
8．親子関わり見直し	3.67 (.94)	3.83 (.87)	3.85 *	低＜高
9．地域のつきあい	3.05 (1.15)	3.61 (1.05)	31.23 **	低＜高
10. つきあい面倒	2.38 (1.03)	2.23 (.94)	3.06 n.s	
11. 情報左右	2.21 (1.03)	2.13 (.94)	.86 n.s	
12. 自信喪失	2.17 (1.12)	2.10 (1.01)	.59 n.s	
13. 子ども比較	2.64 (1.19)	2.72 (1.16)	.64 n.s	

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

（2）利用形態による各得点の比較

広場の利用の仕方により得点に違いが見られるかを調べるため，利用形態による一元配置分散分析を実施した。広場でどのように過ごしているかを尋ねた5項目の得点を合計し，利用形態の数得点とした。例えば，得点1は自由に過ごすだけなど利用形態が一つであることを示す。4点の群が少なかったため3点以上としてまとめ，全体を3群に分類した。各群の人数は以下のとおりである。

表－12　利用形態別人数

利用形態数	人数（%）	
1	315	(62.6)
2	141	(28.0)
3以上	47	(9.4)

1．広場の機能

表－13　利用形態による広場機能得点の比較

	1	2	3以上	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.47 (.55)	4.67 (.44)	4.77 (.48)	11.62 **	1<2,3
リフレッシュ	3.45 (.99)	3.85 (.79)	4.11 (.68)	17.18 **	1<2,3
交流	3.91 (.92)	4.40 (.61)	4.46 (.67)	22.26 **	1<2,3
情報	3.64 (.86)	3.91 (.73)	4.04 (.66)	8.49 **	1<2,3
親子関係	3.57 (.92)	3.79 (.82)	4.00 (.64)	6.55 **	1<2,3
自己発揮	2.41 (.89)	2.60 (.90)	3.03 (1.08)	10.18 **	1,2<3
相談	3.30 (1.11)	3.74 (.90)	4.09 (.74)	17.31 **	1<2,3

（　）内は標準偏差　**：p<.01

全ての項目で有意な差が見られた。順に「遊び場」$F(2,498)=11.62, p<.01$，「リフレッシュ」$F(2,498)=17.18$，$p<.01$，「交流」$F(2,498)=22.26, p<.01$，「情報」$F(2,498)=8.49, p<.01$，「親子関係」$F(2,498)=6.55, p<.01$，「自己発揮」$F(2,498)=10.18$，$p<.01$，「相談」$F(2,498)=17.31, p<.01$ であった。多重比較の結果，「自己発揮」は利用形態が3の群が1と2の群に比べて得点が高く，そのほかの項目は利用形態が2と3の群が1の群に比べて高得点であった。

よって，利用頻度による分散分析結果とあわせて，仮説4「利用頻度や利用形態が多いほど広場を活用し，機能の評定も高いだろう」は支持された。

2．広場利用の効果

表－14　利用形態による効果得点の比較

	1	2	3以上	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.64 (.95)	3.96 (.80)	4.11 (.89)	9.77 **	1<2,3
2．不安減少	3.40 (1.03)	3.81 (.94)	4.17 (.73)	17.84 **	1<2,3
3．子ども交流	4.39 (.81)	4.55 (.67)	4.77 (.56)	6.18 **	1<3
4．居場所	4.47 (.72)	4.65 (.66)	4.77 (.43)	5.97 **	1<2,3
5．リフレッシュ	3.89 (.99)	4.18 (.82)	4.43 (.71)	9.81 **	1<2,3
6．母親友達	3.54 (1.20)	4.22 (.86)	4.49 (.83)	29.10 **	1<2,3
7．子育て楽しさ	3.55 (.94)	3.93 (.81)	4.00 (.88)	11.58 **	1<2,3
8．親子関わり見直し	3.65 (.96)	3.90 (.78)	4.13 (.74)	7.96 **	1<2,3
9．地域のつきあい	3.12 (1.12)	3.76 (.96)	4.09 (1.01)	28.28 **	1<2,3
10. つきあい面倒	2.37 (1.01)	2.15 (.94)	2.17 (.89)	2.88 n.s	
11. 情報左右	2.22 (1.00)	2.12 (.99)	1.89 (.73)	2.54 n.s	
12. 自信喪失	2.11 (1.06)	2.18 (1.07)	2.09 (1.02)	.27 n.s	
13. 子ども比較	2.60 (1.18)	2.82 (1.15)	2.87 (1.17)	2.21 n.s	

（　）内は標準偏差　**：p<.01

ポジティブな効果を表す9項目全ての得点で有意な差が見られた。順に，「子育ての知識などを学べる」F(2,496)=9.77, p<.01,「今までの不安が減った」F(2,496)=17.84,p<.01,「子どもが他の子どもと遊べる」F(2,498)=6.18,p<.01,「気軽に行ける居場所ができた」F(2,499)=5.97,p<.01,「リフレッシュができる」F(2,498)=9.81,p<.01,「自分の友達ができた」F(2,497)=29.10,p<.01,「子育てが楽しくなった」F(2,499)=11.58,p<.01,「子どもとのつき合いかたを見直せる」F(2,497)=7.96,p<.01,「地域でのつき合いが広がった」F(2,497)=28.28,p<.01, である。多重比較の結果,「子どもが他の子どもと遊べる」では利用形態が3の群が1の群に比べて得点が高く，その他の項目では利用形態が2と3の群がそれぞれ1の群に比べて得点が高かった。

（3）子どもの性別

子どもの性別による各得点の差を調べるため，男女2群の比較を行なった。

1．広場の機能

いずれの項目も有意な差は見られなかった。

表－15　性別による広場機能得点の比較

	男	女	F値・分散分析
遊び場	4.57 (.51)	4.53 (.53)	.68 n.s
リフレッシュ	3.62 (.96)	3.63 (.92)	.02 n.s
交流	4.09 (.85)	4.12 (.85)	.18 n.s
情報	3.77 (.83)	3.73 (.81)	.29 n.s
親子関係	3.70 (.86)	3.64 (.91)	.47 n.s
自己発揮	2.53 (.95)	2.51 (.91)	.04 n.s
相談	3.51(1.06)	3.48(1.07)	.08 n.s

（　）内は標準偏差

2．広場利用の効果

「子どもとのつき合いかたを見直せる」で有意な差が見られた（F(1,498)=4.02,p<.05)。得点は男児が女児よりも得点が高かった。

表－16　性別による効果得点の比較

	男	女	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.77 (.93)	3.78 (.92)	.02 n.s	
2．不安減少	3.56 (1.02)	3.62 (1.01)	.42 n.s	
3．子ども交流	4.45 (.79)	4.49 (.72)	.36 n.s	
4．居場所	4.53 (.70)	4.57 (.68)	.42 n.s	
5．リフレッシュ	3.99 (.96)	4.06 (.92)	.81 n.s	
6．母親友達	3.76 (1.19)	3.88 (1.08)	1.31 n.s	
7．子育て楽しさ	3.71 (.90)	3.69 (.94)	.09 n.s	
8．親子関わり見直し	3.84 (.86)	3.68 (.94)	4.02 *	女<男
9．地域のつきあい	3.36 (1.15)	3.43 (1.10)	.46 n.s	
10. つきあい面倒	2.25 (.99)	2.34 (.98)	1.20 n.s	
11. 情報左右	2.15 (.97)	2.18 (.99)	.12 n.s	
12. 自信喪失	2.14 (1.04)	2.11 (1.08)	.09 n.s	
13. 子ども比較	2.74 (1.16)	2.63 (1.18)	1.13 n.s	

(　　) 内は標準偏差　*：p<.05

（4）子どもの年齢

子どもの年齢により各得点に差が見られるか検証するため，0歳，1歳，2歳，3歳，4歳以上の5群に分類して比較を行なった。

1．広場の機能

表－17　年齢による広場機能得点の比較

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳以上	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.55(.50)	4.60(.53)	4.47(.52)	4.63(.49)	4.07(.73)	2.95 *	n.s
リフレッシュ	3.83(.98)	3.63(.95)	3.44(.88)	3.74(.88)	3.07(1.10)	2.84 *	2<0
交流	4.34(.70)	4.12(.83)	4.00(.86)	4.07(.87)	2.86(1.70)	5.87 **	4<0,1,2,3 2<0
情報	3.96(.77)	3.76(.85)	3.64(.80)	3.73(.73)	3.05(.80)	3.12 *	4<0
親子関係	3.85(.72)	3.63(.94)	3.53(.83)	3.92(.85)	3.57(.98)	2.83 *	2<3
自己発揮	2.73(.91)	2.46(.94)	2.55(.89)	2.45(.98)	2.43(.93)	1.34 n.s	
相談	3.80(.90)	3.46(1.13)	3.42(.98)	3.51(1.02)	2.71(1.25)	2.78 *	n.s

(　　) 内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

「自己発揮」以外の項目で有意な差が見られた。順に，「遊び場」F(4,496)=2.95,p<.05，「リフレッシュ」F(4,496)=2.84,p<.05，「交流」F(4,496)=5.87,p<.01，「情報」F(4,491)=3.12,p<.05，「親子関係」F(4,493)= 2.83,p<.05，「相談」F(4,494)=2.78,p<.05である。多重比較の結果，「遊び場」と「相談」は5群に有意差は見られなかった。「リフレッシュ」は2歳に比べて0歳の得点が高い。「交流」は4歳以上が他の4群に比べて得点が低く，さらに2歳よりも0歳が高い得点であった。「情報」は4歳よりも0歳が得点が高く，「親子関係」は2歳よりも3歳で得点が高かった。

したがって，仮説5「子どもの年齢により機能は異なり，子どもの年齢が高いほど自分の力を発揮する場となりやすいだろう」は，年齢による差として部分的に支持された。

2．広場利用の効果

「今までの不安が減った」(F(4,494)=3.63,p<.01)，「子どもが他の子どもと遊べる」(F(4,496)=3.96,p<.01)，「自分の友達ができた」(F(4,495)=2.72,p<.05)，「子育てが楽しくなった」(F(4,497)=3.24,p<.05) で有意な差が見られた。多重比較の結果，「今までの不安が減った」と「子育てが楽しくなっ

た」では2歳に比べて0歳が高得点で，「子どもが他の子どもと遊べる」では4歳が他の4群に比べて低い点数であった。「自分の友達ができた」では4歳に比べて0歳が高得点だった。

表－18　年齢による効果得点の比較

	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳以上	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.93(.87)	3.78(.95)	3.70(.93)	3.73(.83)	3.29(1.11)	1.28 n.s	
2．不安減少	3.94(.96)	3.60(1.04)	3.40(.97)	3.48(.93)	3.29(1.25)	3.63 **	2<0
3．子ども交流	4.40(.71)	4.49(.72)	4.47(.78)	4.59(.73)	3.43(1.51)	3.96 **	4<0,1,2,3
4．居場所	4.58(.61)	4.59(.68)	4.50(.70)	4.45(.83)	4.29(.49)	.94 n.s	
5．リフレッシュ	4.23(.85)	4.03(.97)	3.88(.91)	3.98(.95)	3.86(1.07)	1.73 n.s	
6．母親友達	4.01(1.05)	3.85(1.15)	3.68(1.16)	3.79(1.07)	2.71(1.50)	2.72 *	4<0
7．子育て楽しさ	3.94(.92)	3.75(.95)	3.53(.75)	3.54(1.01)	3.43(.98)	3.24 *	2<0
8．親子関わり見直し	3.87(.92)	3.80(.91)	3.65(.85)	3.77(.95)	3.57(.98)	.87 n.s	
9．地域のつきあい	3.36(1.06)	3.38(1.17)	3.33(1.05)	3.62(1.15)	3.14(1.46)	.75 n.s	
10. つきあい面倒	2.13(1.00)	2.30(1.01)	2.30(.93)	2.39(.97)	2.57(.79)	.82 n.s	
11. 情報左右	2.23(1.04)	2.21(.99)	2.15(.94)	1.95(.91)	2.00(1.00)	.96 n.s	
12. 自信喪失	2.10(1.08)	2.13(1.06)	2.08(.98)	2.23(1.19)	2.43(.98)	.33 n.s	
13. 子ども比較	2.61(1.15)	2.69(1.16)	2.65(1.16)	2.88(1.28)	2.43(.98)	.55 n.s	

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

（5）子どもの数による各得点の比較

子どもの数による各得点の差を検証するため，子どもの数を1人，2人，3人以上の3群に分類し，それぞれの得点の比較を行なった。

1．広場の機能

表－19　子どもの数による広場機能得点の比較

	1人	2人	3人以上	F値・分散分析	多重比較
遊び場	4.57 (.51)	4.57 (.50)	4.17 (.79)	5.26 **	3<1,2
リフレッシュ	3.65 (.96)	3.60 (.85)	3.31 (.99)	1.18 n.s	
交流	4.18 (.80)	3.98 (.90)	3.35 (1.20)	9.71 **	3<1,2
情報	3.81 (.79)	3.67 (.78)	3.00 (1.23)	8.55 **	3<1,2
親子関係	3.68 (.86)	3.73 (.88)	3.09 (1.20)	4.03 *	3<1,2
自己発揮	2.51 (.92)	2.59 (.94)	2.31 (.96)	.74 n.s	
相談	3.57 (1.04)	3.40 (1.03)	2.65 (1.31)	6.95 *	3<1

（　）内は標準偏差　*：p<.05，**：p<.01

「遊び場」（$F(2,498)=5.26, p<.01$），「交流」（$F(2,498)=9.71, p<.01$），「情報」（$F(2,493)=8.55, p<.01$），「親子関係」（$F(2,495)=4.03, p<.05$），「相談」（$F(2,496)=6.95, p<.05$）で有意な差が見られた。多重比較の結果，「遊び場」「交流」「情報」「親子関係」ではいずれも子どもが3人以上の群に比べて1人と2人の群がそれぞれ高得点だった。「相談」では子どもが3人以上の群よりも1人の群の方が得点が高かった。

したがって，仮説6「きょうだい数が少ない群では情報を得る場として機能しているだろう」は支持された。

2．広場利用の効果

「子育ての知識などを学べる」（$F(2,496)=9.28, p<.01$），「今までの不安が減った」（$F(2,496)=15.$

78,p<.01)，「気軽に行ける居場所ができた」(F(2,4989)=4.33,p<.05)，「自分の友達ができた」(F(2,497)=7.32,p<.01)，「子育てが楽しくなった(F(2,499)=3.12, p<.05)，「地域でのつき合いが広がった」(F(2,497)=5.64,p<.01) で差が見られた。多重比較の結果，「子育ての知識などを学べる」「今までの不安が減った」「地域でのつき合いが広がった」の3項目では子どもが3人以上の群に比べて1人と2人の群がそれぞれ高得点であった。「気軽に行ける居場所ができた」「自分の友達ができた」では子どもが3人以上の群よりも1人の群のほうが得点が高かった。「子育てが楽しくなった」では有意差はみられなかった

表－20　子どもの数による効果得点の比較

	1人	2人	3人以上	F値・分散分析	多重比較
1．子育て知識	3.83 (.92)	3.71 (.86)	2.88 (.99)	9.28 **	3<1,2
2．不安減少	3.68 (.99)	3.48 (.99)	2.35 (1.00)	15.78 **	3<1,2
3．子ども交流	4.48 (.73)	4.48 (.82)	4.24 (.83)	.84 n.s	
4．居場所	4.59 (.65)	4.47 (.72)	4.17 (1.10)	4.33 *	3<1
5．リフレッシュ	4.02 (.96)	4.06 (.87)	3.67 (.91)	1.39 n.s	
6．母親友達	3.91 (1.11)	3.64 (1.17)	3.00 (1.28)	7.32 **	3<1
7．子育て楽しさ	3.76 (.90)	3.58 (.89)	3.33 (1.24)	3.12 *	n.s
8．親子関わり見直し	3.78 (.89)	3.80 (.90)	3.29 (1.10)	2.46 n.s	
9．地域のつきあい	3.39 (1.13)	3.50 (1.08)	2.53 (1.07)	5.64 **	3<1,2
10. つきあい面倒	2.26 (1.00)	2.32 (.89)	2.71 (1.21)	1.73 n.s	
11. 情報左右	2.20 (.99)	2.14 (.93)	1.71 (.92)	2.12 n.s	
12. 自信喪失	2.13 (1.08)	2.19 (1.00)	1.76 (.97)	1.22 n.s	
13. 子ども比較	2.69 (1.20)	2.76 (1.08)	2.12 (1.17)	2.25 n.s	

(　　) 内は標準偏差　*：p<.05, **：p<.01

考察

1．広場の機能

広場の機能得点についての記述統計と，広場・利用者の特性による一元配置の分散分析結果に基づき，本研究の仮説1から仮説6を検証した。

① 全体的な傾向

想定した7つの機能について〔自分の力を発揮する場〕以外は平均値が評定の中間点を超えたため，〔子どもの遊び場所〕〔息抜きやリフレッシュの場〕〔他の母親との交流の場〕〔情報や知識を得る場〕〔親子関係を見直す場〕〔相談する場〕の6つについては機能を果たしていることが確認され仮説1はほぼ支持された。とくに〔遊び場〕として高く評価されており，〔交流〕の場としても認識されていることが明らかになった。母親たちが子どもの遊び場を必要としていることは先行研究（神田・山本，2001；厚生労働省，2003）でも示されており，室内で安全に遊ぶことのできる広場が遊び場としてニーズにこたえているといえる。さらに，自由記述では「雨の日など外で遊べないときに利用している」「ハイハイでのんびり遊べる」という声もあり，室内という点をメリットとして利用していることもうかがえる。さらに，「のびのび遊ぶ子どもの姿を見られてうれしい」という意見も多く，子どもの遊び場として機能することで母親にも肯定的な感情を生じさせていることがわかった。0123吉祥寺のアンケートにおいて初来館時の利用目的は半数以上が「子どもの遊び場として」と答えているが（柏木・森下，1997），本研究の自由記述でも「最初は子どもの遊び場だったが，スタッフに育児のことを聞いたり話し相手になってもらって育児を助けられた」との記述があり，広場を利用するきっかけとして〔遊び場〕という機能が大きな役割を果たしていることがわ

かる。自由記述の例のように，遊び場として利用し始めてから相談したり母親同士交流したりと他の機能がいきてくることも多いと思われる。〔交流〕機能については，自由記述でも母親同士のつきあいについて31人が回答しており，広場が母親同士の関係に意識を向けたりつきあいを広げたりする場となっていることがわかる。とくに「友達ができた」「気軽に話ができる」という答えが多く，交流機能の高さを裏付けている。〔自分の力を発揮する場〕という機能については主体的な参加や関与を必要とするものであり，利用形態でもサークル活動や広場活動への関与は少なかったように，利用者自身が積極的に活動する場とはなっていないことが明らかになった。自分の力を発揮する場が広場である必要はないが，「支えあいの子育て」（小出，1999など）が唱えられる昨今，子育ての当事者たちが支援される立場にとどまらず主体的に環境に働きかけていけるような状況をつくることが子育て支援のめざすところでもある。そのためには広場においても，子育ての当事者たちの意見が反映されやすく提案が拾い上げられるような体制や雰囲気を整え，利用者自身の活動や広場への関与がしやすいようにすることが求められる。〔自分の力を発揮する場〕として現時点では機能していなくとも，今後に向けて，その機能を求める利用者に応じられるような基盤を築く必要があるのではないだろうか。また，広場の機能についてその他としては「集団生活の場」「子どものストレス発散」「発達促進の場」など，子どもにとっての機能も挙げられた。自由記述でも「様々な月齢の子どもが集まりよい刺激になっている」「社会性を自然に身につけていける」など子どもの発達への好影響が述べられた。本調査の７つの広場機能はほとんどが母親にとってのものであったが，子ども自身の発達を考える上で広場が子どもに果たす役割も重要な視点である。とくに母親たちが述べているように広場は就園前の集団の場として位置づけられ，不特定多数が自由に出入りできるという性質からも特徴を有するだろう。

② 広場の特性による比較

スタッフの参加形態とプログラムの実施頻度という広場の特性による一元配置の分散分析を行い，仮説2と仮説3を検証した。その結果，「広場にスタッフが参加しているほうが情報の収集や親子関係の見直し，相談などの点で広場が機能するだろう。」という仮説2については，情報，親子関係見直し，相談の3つの機能では有意差はみられず仮説は支持されなかった。ただし，平均値を見ると遊び場以外のすべての機能得点でスタッフが参加しない群の平均値が4群の中で最も低くなっており，スタッフの参加／非参加により機能に差がみられる可能性も推測される。本研究ではスタッフの参加形態を4群に分けており，かつ非参加群の人数が少なかったことも有意な結果が示されなかった要因と考えられる。スタッフの参加／非参加による機能の差異については今後さらに検討すべきであろう。

次に仮説3「プログラムが日常的に実施されていると子どもの遊び場としての機能が高いだろう」について，多重比較では群間に有意差は示されなかったものの分散分析で有意差がみられ，平均値をみると週1～2回実施の群と毎日実施の群が他の3群に比べて高得点であったことより，仮説は支持された。想定したように，日常的に行なわれるプログラムは手遊びや絵本など子どもが楽しめる活動が多く，子どもの遊び場所として認識されやすいと思われる。その他の機能でも差がみられ，毎日プログラムを実施している方が月1～2回実施の群よりも交流機能が高いことが明らかになった。日常的にプログラムがあることにより母親同士も知り合うきっかけが増えるという直接的な効果と，プログラムの時間の前後にスタッフとの関わりが増え母親同士をつなぐ機会となるという間接的な効果が考えられよう。

③ 利用者の特性による比較

広場機能得点について，利用頻度，利用形態数，子どもの性別，年齢，きょうだい数により一元配

置分散分析を実行し，仮説4～6を検証した。

仮説4「利用頻度や利用形態が多いほど広場を活用し，機能の評定も高いだろう」は，利用頻度では自己発揮機能以外のすべてで利用頻度高群が有意に得点が高く，利用形態数ではすべての機能で利用形態が1の群が有意に低得点であったことより支持された。利用頻度の高さが高いほど広場の機能を評価し，また反対に広場の機能を評価するからこそしばしば利用するという双方向の関連が想定される。利用形態についても同様に，複数の利用の仕方をするために機能も高く評価する可能性と，機能を高く評価し意味ある場と考えるがゆえにより多くの利用の仕方をする可能性とがある。利用形態では，利用形態数が3以上の群が自己発揮機能を高く評価していた。利用形態が3つ以上ということは，受動的な参加の仕方に加えて自分自身で講座やサークルに参加するか活動の企画運営に携わるといった能動的な参加の仕方もしているということであり，この場合は利用の仕方が自己発揮機能を高く評価させるという方向の関係が想定されよう。

仮説5「子どもの年齢により機能は異なり，子どもの年齢が高いほど自分の力を発揮する場となりやすいだろう。」は，年齢による機能の違いという点で部分的に支持された。自己発揮については，「子どもの年齢が上がり母親に余裕ができると積極的に活動するようになり広場においても自己発揮をする」との仮説を立てたが，群間に差は見られず平均値も0歳児が最も高得点であり支持されなかった。自己発揮機能についてはどの群も平均値が低いが，その中で0歳児の母親は全体的に機能を高く評価する傾向から実際の自己発揮機能よりも高い得点が示されたことが考えられる。平均値に有意差はみられず，自己発揮機能については年齢に関係なく機能していないといえるだろう。リフレッシュ，交流，情報，親子関係見直しの各機能で年齢による差が示された。リフレッシュ，交流，情報の3つの機能は0歳児の母親が高く評価していた。生後一年の乳児を抱えている母親は育児不安（牧野，1982；服部・中嶋，2000）や育児疲労（佐々木ら，1980；服部・中嶋，2000）がつよいことが報告されており支援ニーズの高さも推察できる。本研究の結果は0歳児の母親にとって支援の場として広場が有効であることを示すものだろう。さらに，大阪府吹田市の子育て支援センターの活動について述べた垣内・櫻谷（2002）は，「0歳児で地域に根ざして育児ができるようになれば，その後の育児はずっと楽になるはずである」として0歳児の母親への支援を今後の課題として挙げている。とくに0歳児の母親の仲間つくりの支援の充実を重点としているが，本研究では交流機能が高く評価されたことより母親同士の交流の場として広場が機能していることが明らかになった。今後はその交流をさらに地域へと発展させるような支援が求められよう。

仮説6「きょうだい数が少ない群では情報を得る場として機能しているだろう。」は，きょうだいが3人以上の群に比べて1人と2人の群がそれぞれ情報機能得点が有意に高く，平均値を見ても2人より1人のほうが高得点であったことより支持された。神田・山本（2001）では子どもが1人の場合に育児情報がほしいとする率が高いことが示されているが，広場はそのような親にとって情報を集める場としてニーズを満たし機能していることが確認された。さらに，遊び場，交流，親子関係，相談の各機能においてもきょうだいが少ない群が機能を高く評価するという結果が得られ，これらの機能についてもきょうだいが少ない群にとって意味を持っているといえよう。とくに一人っ子の母親（初産婦）は初めての育児や経験に戸惑うことや不安も多いことと予想されるが，平均値をみても交流や情報，相談機能の得点が他の群と比べて高かったことより広場が有効にその機能を果たしていることが推察される。経産婦と比べて初産婦は育児関連ストレスが高いこと（佐藤ら，1994）や育児ストレスの増加に対して脆弱性が高いこと（難波・田中，1999）が示されており，丹羽（1999）でも最も育児不安が高いとされる生後

1ヵ月時で第1子の母親が第2子以降の母親よりも「心細い」「不安」「誰かに確認したい」と感じていることが報告されている。これらの先行研究からも初産婦や育児経験の少ない母親は支援ニーズが高いことが予想される。本研究では初産婦群で情報や相談機能が高かったが，これらの機能は不安の減少にもつよく関連していることが示されており，広場が初産婦の不安の減少にも役立っていることが実証されたといえるだろう。また，育児ストレスに対するサポートの緩衝効果は初産婦においてのみ認められ，かつ育児ストレスのレベルが中程度までである（Hisata et al., 1990）との知見もあり，育児ストレスが高じないうちにサポートすることが重要である。センターの広場では日常的なかかわりの中でストレスや不安の減少といった問題の対処とともにストレスの高まりを防ぐという予防的な対応も可能になると思われ，広場が初産婦のサポートとして果たす役割は大きいと思われる。

2．広場利用の効果

① 全体的な傾向

広場を利用することによる主観的な効果について，ポジティブな効果は全て評定中間点を超えており母親たちが効果を感じていることが示された。とくに「気軽に行ける居場所ができた」「子どもが他の子どもと遊べる」「リフレッシュができる」は平均値が高く，母親たちがこのような効果を強く感じていることが明らかになった。自由記述でも「子どもがお友達を作れる」「イライラしながら子育てすることがなくなった」「気分転換やリフレッシュになる」などの効果が多くの母親から述べられており，効果が確かに感じられていることをうかがわせる。また，ネガティブな効果は「他の子どもと自分の子を比べてしまう」がやや高めであったが（平均値2.69），その他の「他のお母さんたちとのつき合いが面倒だ」「いろいろな情報や話に左右されてしまう」「自分の育児に自信がなくなることがある」とともに評定中間点よりも低い値であり，ネガティブな効果はあまり感じられていないことが示された。このように全般的に母親たちが広場の利用によって効果を感じている中で，「地域でのつき合いが広がった」はポジティブな効果の中で最も平均値が低く，母親たちが他と比べてあまり感じていないことが明らかになった。リフレッシュ，居場所，子育てが楽しくなったなどはすべて個人単位の結果であり，子どもが他の子どもと遊べるという効果も広場における効果ともとらえられるが，そのような個人単位での効果やその場での変化は比較的効果が得られやすいことも考えられる。それに対して，地域でのつき合いの広がりは母親同士の強固なつながりが持続しないと起こりにくく広場の外での変化として二次的な効果ということができる。効果をあげるまでに時間がかかるという難しさがあるが，地域でのつき合いの広がりは現在の子育て支援のキーポイントともいえる重要な指標であり，広場での支援の効果を個人単位でとどめず地域へと波及させることが今後のさらなる課題と言えよう。

効果の項目同士の関連をみると，ポジティブな効果同士，ネガティブな効果同士はすべて相関関係がみられ，効果を感じる人は全般的に大きく感じ，逆に効果を小さく感じる人は全般的に小さく感じる傾向が示唆される。項目間の相関の中でとくに「母親友達」と「地域のつきあい」は相関が高く（r=.682），母親の友達ができることと地域のつきあいが広がることは深く関連していることが示された。地域のつきあいの広がりについては効果の実感が乏しいことを前述したが，母親の友達ができるとつきあいも広がることが実証されたことより地域でのネットワークの形成にはまずは母親同士のつながりを築くことの必要性が確認された。これは原田（2002）の主張に一致しており，母親同士のつながりを築くことの重要性が広場の効果という面からも実証されたといえるだろう。さらに，「子育て知識」と「不安減少」にも高い相関が見られ（r=.634），子育ての知識を得るこ

とが不安の減少と関連していることが確認された。また，「不安減少」や「子育て楽しさ」は多くの項目と高い相関を示しており，「リフレッシュ」「母親友達」「地域のつきあい」などがとくに不安減少や子育ての楽しさを感じることと関連していることがわかった。厚生労働省の調査（2003）では，地域において子どもを通じた親密なつきあいのある母親は不安が少なく，子育てを楽しんでいる割合が高いことが示されており，本研究の結果からも母親自身の友達ができたり地域でのつきあいが広がるほど不安が軽減したり子育てを楽しいと感じる傾向が示されたと言えよう。

② 広場の特性による比較

担当者がときどき参加している群で，母親の友達ができたり地域のつきあいが広がると同時に子どもを他の子と比べる傾向が強かった。この群は広場の交流機能も高く，決まったスタッフが関わることで母親同士が知り合ったり交流が地域にも広がったりしていると考えられる。同時に，母親同士が知り合いつきあっていく中ではお互いの子どもとも関わる機会が増え，自分の子どもとの違いなどに気づいたり比べたりすることも起こりうることが示されたといえるだろう。子どもの比較については否定的な側面を想定していたが，「いい意味で比べる機会」と話す母親もおり，自分の子どもを客観的にみるという肯定的な側面も含むことが示された。子どもの比較は客観視として親子関係を見直すきっかけにもなりうるという視点も大切であると思われる。

また，プログラムが日常的に行なわれていると「居場所ができた」「リフレッシュができる」「地域のつきあいが広がった」という効果が感じられていることが明らかになった。プログラムが日常的に行なわれていると母親同士の交流が進むことが機能得点から示されており，プログラム内容を考慮するとプログラム自体の効果と考えるよりもそれをきっかけとしたスタッフとのかかわりや母親同士の交流による間接的な効果ととらえられる。

③ 利用者の特性による比較

利用の仕方と効果については，利用頻度が高い群と利用形態が多い群で全般的にポジティブな効果を大きく感じていることがわかった。広場機能やスタッフの役割と同様に，積極的な利用をするために効果が大きく感じられる場合と効果を大きく感じるために積極的な利用をする場合との2方向の因果関係が想定される。

子どもの年齢については，0歳児において「今までの不安が減った」「母親の友達ができた」「子育てが楽しくなった」という効果が大きく感じられていた。この3つの効果は相互に関連しており，生起順から考えると，母親の友達ができることで不安が減ったり子育てが楽しくなったりするという関係が想定される。効果の点からも0歳児の母親にとって母親同士交流することが不安を減少させて子育ての楽しさを感じることにつながることが示唆され，広場がそのような場所であることが実証された。また，4歳以上の子どもでは子供同士の交流はしにくいことが示された。広場の利用者の多くが3歳以下であるため，年長児は他の子どもと遊ぶことはあまりないといえる。子どもの数と効果についてみると，「子育ての知識が学べる」「今までの不安が減った」「気軽に行ける居場所ができた」「母親の友達ができた」「地域のつきあいが広がった」という効果は子どもが3人以上の母親は子どもが1人または2人の母親に比べてあまり感じていないことが明らかになった。育児の知識や対人ネットワークなどは子どもの数が多い場合にはすでにもっていることが予想され，それが効果の小ささにつながっているものと思われる。「気軽に行ける居場所ができた」「母親の友達ができた」の2つについては一人っ子の母親がとくに感じており，交流や情報，相談といった広場機能やスタッフ役割に対する高い評価と一致する。

要約的結論

本研究では，地域での子育て支援における子ども家庭支援センターの広場の意義を検討するため，広場の機能と広場利用の効果という2点に着目し，

広場がどのような場となっているのか検証した。

本研究では広場について7つの機能を仮説したが，〔子どもの遊び場所〕〔息抜きやリフレッシュの場〕〔他の母親との交流の場〕〔情報や知識を得る場〕〔親子関係を見直す場〕〔相談する場〕の6つについては機能を果たしていることが確認され仮説はほぼ支持された。ただし，〔自己の力を発揮する場〕とはなっていないことが明らかになり，仮説は部分的に棄却された。現時点では広場はとくに遊び場として高く評価されており，遊び場に対するニーズの高さに応えているといえる。また，自由記述からは〔集団生活の場〕〔発達促進の場〕など，子どもにとっての機能も示唆された。各機能は関連しあっており，広場は日常的な活動の中でさまざまな場となりうることがわかる。中でも相談や親子関係見直しの上では情報を得ることが大きな意味を持っており，情報や知識面での支援の重要性がうかがえる。次に，「広場にスタッフが参加しているほうが情報の収集や親子関係の見直し，相談などの点で広場が機能するだろう。」という仮説2は支持されなかった。ただし，平均値を見るとスタッフの参加／非参加により機能に差がみられることも推測される。これについては非参加群の少なさなどの方法論上の問題が指摘され，今後の課題である。なお，スタッフの参加により促進されているものは母親同士の交流機能であることが明らかになった。つなぎ役の役割と広場の交流機能は高い相関も示され，母親同士が知り合うきっかけをスタッフがつくるほど交流が進んでいることが実証された。つづいて，仮説3「プログラムが日常的に実施されていると子どもの遊び場としての機能が高いだろう」も頻度が高い群が有意に高得点であり仮説は支持された。同時に交流機能の高さも示され，日常的にプログラムがあることにより母親同士も知り合うきっかけが増えるという直接的な効果と，プログラムの時間の前後にスタッフとの関わりが増え母親同士をつなぐ機会となるという間接的な効果が考えられる。仮説4「利用頻度や利用形態が多いほど広場を活用し，機能の評定も高いだろう」は，利用頻度・利用形態数ともに支持された。積極的に利用するほど広場の機能を高く評価するという方向と，反対に広場の機能を評価するからこそ積極的に利用するという方向と，2方向の関連が想定される。仮説5「子どもの年齢により機能は異なり，子どもの年齢が高いほど自分の力を発揮する場となりやすいだろう。」は，年齢による機能の違いという点で部分的に支持された。年齢による機能の違いは，リフレッシュ，交流，情報，親子関係見直しの各機能で示された。とくに，0歳児の母親にとって，広場がリフレッシュ，交流，情報の場であることが明らかになった。生後一年の乳児を抱えている母親は育児不安や育児疲労のつよさが報告されており，仲間づくり支援の重要性が指摘されているが，本研究の結果からは支援の場として広場が有効であることが示唆される。また，0歳児の母親にとってスタッフは他の母親と知り合うきっかけをつくってくれる人と感じられており，交流する場となるためにスタッフが大きな役割を果たしていると考えられる。さらに，効果の点からも0歳児の母親では母親同士交流することが不安を減少させて子育ての楽しさを感じることにつながることが示唆され，広場が実際にそのような場所であることが実証された。

仮説6「きょうだい数が少ない群では情報を得る場として機能しているだろう。」は，情報機能得点の高さより支持され，初産婦の情報に対するニーズの高さを満たしていると考えられる。さらに，遊び場，交流，親子関係，相談の各機能においてもきょうだいが少ない群が機能を高く評価していた。とりわけ，育児関連ストレスや育児ストレスの増加に対する脆弱性の高さが指摘される初産婦にとって，広場は情報や相談機能の高さをつうじて不安の減少にも役立っていることが実証された。

広場を利用することによる効果については，「気軽に行ける居場所ができた」「子どもが他の子どもと遊べる」「リフレッシュができる」などが

大きく感じられており，個人単位での効果やその場での変化は比較的効果が得られやすいことも考えられる。広場での支援の効果を個人単位でとどめず地域へと波及させることが今後のさらなる課題と言えよう。また，母親の友達ができることと地域のつきあいが広がることは深く関連していることが示され，地域でのネットワークの形成に母親同士のつながりの構築が必要であるとの原田（2002）の主張を支持する結果となった。さらに，母親自身の友達ができ地域でのつきあいが広がるほど不安が軽減したり子育てを楽しいと感じる傾向が示され，厚生労働省の調査（2003）に一致した。不安の軽減や子育ての楽しさのために地域での交流が重要であることが本研究からも実証され，今後の子育て支援の方向性に示唆を与えるものと思われる。

以上のように，仮説はほぼ支持され，センターの子育て広場がさまざまな機能を果たしていることが実証された。とくに交流機能は地域へのネットワークの広がりを促進し，不安の減少や子育ての楽しさにもつながる点で，地域における子育て支援に大きな意義を持つことが示唆された。また同時に，そのためにはスタッフが日常的に関わる機会を持ち相談や話に応じたり母親同士をつなげたりすることが不可欠であることが明らかになった。

文献

原田正文（2002）子育て支援とＮＰＯ 親を運転席に！支援職は助手席に！。朱鷺書房

服部律子・中嶋律子（2000）産褥早期から産後13ヶ月の母親の疲労に関する研究（２）マタニティブルーと産後の抑うつ症状。小児保健研究，59，669-673

Hisata, M., Miguchi, M., Senda, S., & Niwa, I. (1990) Childcare stress and postpartrum depression:An examination of the stress-buffering effect of marital intimacy as social support. *Research in Social Psychology*, 6, 42-51

垣内国光・櫻谷真理子（2002）子育て支援の現在 豊かな子育てコミュニティの形成をめざして。ミネルヴァ書房

柏木恵子・森下久美子（1997）子育て広場 0123 吉祥寺。ミネルヴァ書房

神田直子，山本理絵（2001）乳幼児を持つ親の，地域子育て支援センター事業に対する意識に関する研究 ── 子育て支援事業参加者と非参加者の比較から ──。 保育学研究 39，80-86.

小出まみ（1999）地域から生まれる支えあいの子育て。ひとなる書房

厚生労働省（2003）子育て支援策等に関する調査研究（報告書概要版）。

牧野カツコ（1982）乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉家庭教育研究所紀要，３，34 - 56。

難波茂美・田中宏二（1999）サポートと対人葛藤が育児期の母親のストレス反応に及ぼす影響 ── 出産直後と３ヵ月後の追跡調査 ──。健康心理学研究，12，37-47

丹羽洋子（1999）今どき子育て事情 2000人の母親インタビューから。ミネルヴァ書房

佐々木保行・佐々木宏子・中村悦子（1980）乳幼児を持つ専業主婦の育児疲労（第２報）── 生活心理学的アプローチ ──。宇都宮大学教育学部紀要，30，1，11－25

佐藤達哉・菅原ますみ・戸田まり・島 悟・北村俊則（1994）育児に関連するストレスとその抑うつ重症度との関連。心理学研究，64，409-416